

エッセイ

私の人生

徳増 公明

第四章

巻頭言（日本ムスリム協会会報より）

巻頭言

核兵器禁止条約に思う

会長 アミン 徳増公明

8月3日～4日、京都において「比叡山宗教サミット、30周年記念世界宗教者平和祈りの集い」が開催された。世界各地からの諸宗教指導者が共に神仏に世界平和を祈り、その実現のために宗教者として何ができるのかを模索する集まりでもあった。現在地球上で起きている貧困、人権、環境、テロ、核拡散などの問題は世界的規模の問題であり、一民族、一宗教、一国家では解決できない深刻な課題となっている。

私はシンポジウムの分科会1「核廃絶と原子力問題を考える」に参加した。この分科会の基調発題に出席した宗教や国籍の異なる5名のパネリストは、全員がそれぞれの立場に立って核廃絶を主張し、核兵器使用を強く非難した。

今年7月、国連で核兵器禁止条約が122カ国の賛成で採択されたが、米国など核保有国は反対し、米国の核の傘の下にある日本や韓国は棄権した。反対派の理由として「核によって核を牽制するという核抑止論」である。しかし、もし誤って核を使用した戦争を始めたとしたら人類は死滅し、地球が荒廃する危険性を孕んでいる。世界で唯一の被爆国として多数の悲惨な犠牲者を出

し、また今も福島原発の放射能汚染に厳しい対応を迫られている日本としては、条約に賛成すべきだったと多くの国民が思っていることだろう。どのような立場であれ、日本は広島・長崎の原爆の恐ろしさ、悲惨さをもっと世界にアピールし、積極的に核保有国に対して核廃絶の意思と行動を示すべきである。それには関係者が一つのテーブルについて、対等な立場で相手の立場を尊重し謙虚さを持って、忍耐強く成功させる努力が肝心である。

このたびの「宗教サミット」で発出された世界平和を願う「比叡山メッセージ2017」(参照：p.11)を世界の多くの人に届け、人々の良心に訴え宣布しなければならない。

「人を殺した者、地上で悪を働いたという理由もなく人を殺す者は、全人類を殺したのと同じである。人の生命を救う者は、全人類の生命を救ったのと同じである。」(クルアーン5章32節)

巻頭言

利己主義の抑制

会長 アミン 徳増公明

宇宙から見ると、地球は小さな小さな存在である。その小さな星に約70億人の人間が住んでいる。人間は、アッラーからいただいた恩恵でもある様々な欲望を満たしつつ喜怒哀楽し、ほんのわずかな時間、生かされていることにまず気付きたいものである。また、すべて人間は土から創造されたひとりの人間アードムからの子孫として生まれ、再び土に戻っていく存在であることにも気付きたいものである。

そのような人間、私達は1日1日を大切にし、充実した良き日々を送ろうと努力している一方、本能的自己愛から、競争し言い争い、他人のことを顧みず、自己中心に生きていることが多々あるのではないだろうか。

自己愛は自己保全のためには自然なことかもしれない。しかしその欲望には節度がなくてはなるまい。そのための規範をアッラーは啓示によって人間に示されている。自分自身の信仰を深めるためにも、社会秩序を守り、平和な世界を実現するためにも、私たちはその規範を守らなければならない。

今日の社会はファーストと言う言葉で象徴されるように自分、地域、国単位で自己中心的な振る舞いや他者の人

権を無視したような批判、暴言が目立つようだ。彼らの主張が、健全で発展した社会に貢献してくれるならよいのだが、他人への愛や思いやりが欠けて、他人の立場を尊重せずに他人が嫌がることを行えば、対立が発生し、不健全で不安定な社会と陥ってしまう。

アッラーは私たちを、一人一人が異なった形、性格、能力に創造された。それはお互いの違いを認め合い、お互いの人権を尊重し、共生し、平和で健全な社会をつくるためである。

これからもアッラーへの感謝を忘れず、また他人への愛と敬意を忘れず、言動に注意しつつ、謙虚に過ごしていきたいと思う。

人々よ、あなたがたの主を畏れなさい。かれはひとつの魂からあなたがたを創り、またその魂から配偶者を創り、兩人から無数の男と女を増やし広められた方である。あなたがたはアッラーを畏れなさい。かれの御名において頼みごとをする御方であられる。また近所の絆を尊重しなさい。本当にアッラーはあなたがたを絶えず見守られている。(クルアーン4章1節)

巻頭言

少子化問題

会長 アミン 徳増公明

1月4日の毎日新聞の新春座談会に「人口減少受け止め長期国家ビジョン」について識者4人の放談が記載されていた。今の日本は883兆円の借金を抱えているという。このまま放置すると国の経済は破綻するかも知れない。その要因の一つが少子化問題であると警告する。近年、人口減少が進む一方で、人口構成をみれば高齢の人口が増える。若年層の人口は縮小し、彼らの労働力では高齢者をささえることができなくなるからだ。このような状況を打破するために政府は若者に経済的支援政策を掲げている。識者たちは政府の支援を評価すると共に官民一体となり支援政策をもっと進めるべきだという。一方、イスラム世界では人口のみならず若年層人口は増加し続けているが、それはなぜだろうか？イスラムでは家族は社会を構成する基本単位とされ、家族が健全でなければ健全な社会ができないとしているからであろう。それゆえ家族のもととなる結婚を重視し、幸せな家庭を築くことを奨励している。家族・親族の絆は強くお互いに助け合っている。現在、日本では結婚離れが進んでいるという。2015年の国勢調査によると生涯未婚率は男性23.37%、

女性14.06%とのこと。その要因として、社会状況やライフスタイルの変化が考えられるが、人生は自分のものであり、自由に楽しく過ごすことを優先し結婚をしない人も増えているからとも言う。アッラーは子孫を残すためにも、健全な人間社会を構成するためにも、男と女を創ったのである。日本の若者たちにはそのような人生観を教えるような教育が欠如していないだろうか。若者たちへの経済支援も必要だが、それだけでは根本的な解決にならないと思う。

またアッラーはあなたがたのために、あなたがたの間から配偶者を定め、配偶者からあなたがたのために子女や孫を与えられる。また良いものを与えられる。(クルアーン16章72節)

「若者たちよ、あなた達の中で妻を養える者は結婚しなさい。そうすれば、あなた達の目がよくなる方向に向くのが制され、不道義に走ることもなくなります」(ムスリムの伝承)

巻頭言

中庸な言動

会長 アミン 徳増公明

今年の5月、「ワサティーヤ(中庸)のイスラム」をテーマにした国際会議がインドネシア・ボゴールで開催された。イスラムはいずれにも偏しない中庸な共同体を建設するようにと勧められている。人々が中庸な意識を持ち実行すれば公正・繁栄・平和・連帯・調和な社会が生まれると言う。また行為において謙虚さが求められ、両極端は良くなく、その中間をとるのが良いとされる。

近年の社会問題の大きな要因の一つが中庸から離れた過激な言動が原因となっている。たとえばISのように過激な思想・行動が社会を不安に陥れている。また政治家の過激な発言や行動が人々を動揺させ、不安にさせている。また個人の過激な言動も他人の心情を脅かしている。ではどうしたら中庸な社会を築くことができるのだろうか。クルアーンで述べられている規範そのものが中庸であり、それに従った生き方をすれば中庸な社会が生まれると言うことだろう。今年もラマダーン月を迎えた。クルアーンが啓示された大切な月と言われ、善い行いをすればいつもの月より何百倍もの報酬がアッラーからいただけると言われている。この

機会にクルアーンを熟読し、日常生活を見直し、中庸な言動ができるように心がけたいものである。

このようにわれは、あなたがたを中正(中庸)の共同体とする。(クルアーン2章143節)

あなたがた信仰する者よ、あなたがたに許される、良いものを禁じてはならない。また法を越えてはならない。アッラーは法を越える者を御愛でになられない。(クルアーン5章87節)

アダムの子孫よ、何処のマスジドでも清潔な衣服を体につけなさい。そして食べたり飲んだりしなさい。だが度を越してはならない。本当にかれは浪費する者をお好みにならない。(クルアーン7章31節)

他人に対して(高慢に)あなたの頬を背けてはならない。また横柄に地上を歩いてはならない。本当にアッラーは、自惚れの強い威張り屋をお好みにならない。(クルアーン31章18節)

巻頭言

日本社会に身近になったイスラーム

会長 アミン 徳増公明

私達の事務所が代々木から東五反田へ移って、2年が経ちました。御蔭で活動の場も6倍近く広がり、様々な活動ができるようになりました。特に日本人のイマームが日本語で説教を行う金曜日の合同礼拝は、日本イスラーム史上初めての画期的なことなのです。また会館へ内外からの来訪者も増え、事務局はその対応に追われています。

2年後には、東京オリンピック・パラリンピックがやってきます。今後、内外の協会来訪者はもっと増えていくでしょう。

近年の日本国内におけるイスラーム事情は大きく変化しています。現在国内には約17万人のムスリムがいます。その内、日本人ムスリムはおよそ4万人です。私が入信した55年程前には全国で約3,000人、内日本人は約2,000人と言われていましたので、この半世紀でずいぶんムスリム人口が増大したことになります。その要因は、我が国のイスラーム諸国との経済関係が強化されたこと、観光やビジネスや留学等で日本を訪れるイスラーム諸国からの人々が急増、イスラームが日本社会で身近なものになってきたからだと思われます。こうした中で私たちは日本人

に正しいイスラームを紹介していかなくてはなりません。そして私達自身もイスラームの規範を学び、それを実行することにより、日本社会で評価されるようにならなければなりません。

協会でも、最近入信者が増えました。全国のイスラーム団体でも入信者が増えているようです。半世紀後には、国内のムスリム人口が今の数十倍となり、日本社会で市民権を有するような存在になることを夢見ています。

この6月の総会で選出された15名の新理事たちは、時代の要請で建立されたこの会館を舞台とし、イスラーム布教のために、全力を尽くして行く決意です。しかしながら、協会活動を一層活性化させるためには協会の将来を背負って立つ若い会員の献身的活動、また比較的時間の余裕がある高齢者、及びご婦人たちの活動も必要です。会員各位のご協力も切にお願い申し上げます。

アッラーの援助と勝利が来て、人びとが群れをなしてアッラーの教え(イスラーム)に入るのを見たら、あなたの主の栄光を誉め称え、また御教しを請え。本当にかれは、度々教される御方である。

(クルアーン 110章1～3節)

巻頭言

カアバ聖殿において

会長 アミン 徳増公明

12月中旬マッカにあるラービタ(世界イスラーム連盟)主催の国際イスラーム会議に参加した。

会議会場は宿泊しているマスジド・ハラームに隣接するホテルであったので、マスジド・ハラームで世界中のムスリムたちと一緒に礼拝またウムラをする機会に恵まれた。ここは、ムスリムたちにとって、憧れの場所であり、世界各地から訪れ、集まった人たちは、みな信仰心が高まり、喜びに満ちあふれていた。

この光景に、次のクルアーンを思い起こした。

「人々よ、アッラーの主を畏れなさい。かれはひとつの魂からあなたを創り、その魂から配偶者を創り、兩人から、無数の男と女を増やし広められた方であられる。あなた方はアッラーを畏れなさい。かれの御名においてお互いに頼みごとをする御方であられる。また近親の絆を尊重しなさい。本当にアッラーはあなたがたを絶えず見守られる。」(4章1節)

アッラーは私たち人間の祖、アダムを創り、その配偶者であるハウワーを創り、その両者から無数の男女を創

り、世界中にかれらの子孫を送った。現在、その子孫は75億人以上に増えた。その内、ムスリムは17億人いると言われる。

アッラーは、人間に言葉と知恵を与え、また最高の形に創造され、私たちが幸福に生きるために啓示を下し、美しい自然や食物など様々な恩恵を与えて下さった。そのアッラーに対して、私達は心から感謝、讚美しなければならない。日常の礼拝でもアッラーに感謝、讚美しているが、アッラーの館と言われるカアバ聖殿に行って感謝、讚美したい気持ちはムスリムならばだれでもあるだろう。交通の便が良くなった今日、マッカ訪問者は増える一方で、マスジド・ハラームの周辺には高層のホテルが続々と建立されている。

また、ここでは5回の礼拝後には必ずと言っていいほど、葬儀の礼拝があり、現世の儚さ、最後の審判、永遠の来世の重要さに気付かされる。

このようにマッカは、私達がここから世界に広がって、また戻ってくる場所であり、アッラーの許に帰る場所であり、同時に最後の審判の主であるアッラーを畏れることを再認識させてくれる場所でもある。